

幸福の赤いサクランボ



山辺町の鈴木仁さん(71)は、サクランボ栽培管理技術で私が目標とし、指導して下さる先生だ。

鈴木さんのサクランボは1982年から2004年までの23年間、山形県知事の献上品として、天皇陛下をはじめ各皇室に差し上げられてきた。多くのサクランボ栽培者や流通関係者が、鈴木さんを特別なサクランボの作り手として認めている。

そのような鈴木さんに私が初めて会ったのは、就農して2年目の春先だった。鈴木さんのサクランボ園地に足を踏み入れ、その樹の見事な仕立てに圧倒され、しばらく

師匠・鈴木さんの教えは…

くぼくせんと眺めていたことを今でもはっきりと覚えてくる。



その時私は、眼光鋭く日焼けしてたくましい体格をした鈴木さんに恐る恐る「どんなふうにする」とこんな立派な樹になるんだっす」と教えを請うつもりで聞いてみた。「見ればわかるべ。見てわからねなら何も特別教えることはない」と、帰れと言わんばかりの強い口調で言われた。それが鈴木さんとの最初の出会いだった。

それから5年ほど、私は鈴木さんの園地を頻繁に外から眺め、季節ごとにどんな作業をしているのかのぞいて、鈴木さんがいれば何がしか声をかけたりしていたが、返事はいつもそっけなく「何しに

サクランボの品評会などでの賞状や感謝状、トロフィーが飾られた自宅茶の間でくつろぐ鈴木仁さん

多田耕太郎 1954年山辺町生まれ。金山町のスリップパ工場長を経て、41歳で就農。2009年に法人化し、1・7畝のサクランボ園を経営する。

来た」で終わり、取り付く島がないとはこのことかとも思った。

サクランボを作り続け、自分なりに勉強をして、自信の持てるサクランボができるようになったと思えた2003年の春、思い切った鈴木さんに、最初に出会ったときと同じ「どんなふうにする」とんな立派な樹になるんだっす」と聞いてみた。

そのころもまだ鈴木さんは、私にとっては近寄りがたい、神様のような存在だったのだが、ひとこととぼつりと「欲張らないことだべな、耕太郎君。いっぱいならせようとしなさいことだべ」と言われた。